

1996年度の主な動き

■中央図書館

1996年度中央図書館の活動について述べる。

組織の改編

今後の図書館サービスの充実を見据えて6月に図書課、整理課を発足させ、これまでの国内図書課、外国図書課を廃止した。また、特別資料課を廃止し、図書課に統合した。図書課の設置は、質の高い資料収集体制を築き、ひいては将来のレファレンスサービスの拡充を目指したものである。整理課の設置は、学内各箇所も含めた一元的書誌情報の構築を目指したものである。学内各箇所のWINEへの参加は、語研の他、演博、国際部等が日程にのぼっており、拡大してきている。

また、メディアネットワークセンター(MNC)設置にともない出向および兼務者として職員2名を派遣した。

業務の見直し

専任職員の減少傾向が続き、対して図書館サービスの一層の拡充が望まれているなかで、業務の見直しがおこなわれた。4月よりAVルームカウンター業務が外部委託された。複写マイクロ室ではこれまで受付、撮影業務などが委託されてきたが、これを拡大したものである。8月よりは中央図書館各カウンター業務(昼間)を㈱キャンパスによる請負とした。これらはカウンター業務の定型業務の委託であり、レファレンス業務など図書館の基本的業務は専任職員が責任をもっておこなっている。カウンター業務請負は97年4月より夜間についても実施する予定である。この請負実施にあたっては、キャンパスからの業務管理責任者2名を図書館内に常駐させ、図書館・キャンパスの連絡を密にして業務が円滑に進行するようにしている。この他、図書装備業務を8月より図書供給組合に委託した。

予算関係

大学の財政建直し政策のなかで図書館関係予算も5%カットを目指した予算編成をおこなった。とくに資料収集関係予算が大きな影響を受けないよう運営費のカット率を大きくするなどの努力をおこなった。

予算のなかでは、MNC発足に伴い、WINE関係の開発費、ホストコンピュータ賃借料など約4億5千万円がMNCへ移管された。

電子図書館への取り組み

98年3月の現行ホストのリース切れを控え、次期WINEの開発の本格的検討がおこなわれた。また、図書館での情報発信としてのホームページの充実を各キャンパス図書館と共同でおこない、この1年間で海外も含め約6万回アクセスがあった。ファーストサーチをはじめとする外部データベースの利用提供を行ったこともこれからの図書館サービスを考えるうえで大きな要素であった。

これらの情報発信は今後の図書館活動のなかで急速に増大してくると思われる。

海外大学図書館との協力関係

昨年度に引き続き、海外大学図書館への重複図書の寄贈をおこなった。96年度寄贈先は、中国・復旦大学、四川大学、米・メリーランド大学、スウェーデン・ルンド大学であった。このほか協力関係樹立の申し込みも沢山寄せられており、早稲田大学への研修派遣の申し込みも多い。97年度には中国およびナイジェリアから研修生を受入れる予定である。